

令和7年度 アクションプラン1

重点項目	思いやりのある子供の育成		
重点課題	思いやりのある言葉を使うことができる		
現 状	昨年度は、「その場に合った挨拶ができる」ことを目指して「あいさつレベル」を作成し、定期的にあいさつレベルを振り返らせたり、学期末に他者評価をさせ、結果を全校に広めたりした。他者評価を取り入れたことは、児童が自分を厳しく評価し、実態に近い自己評価につながったと考える。しかし、最終評価が65%となり、目標を達成することができなかった。また、場面が変わると、その場に合った対応が難しく、どのような言葉で相手に自分の思いを伝えたらよいか分からないトラブルになることもあった。 そこで、継続して挨拶をすることを意識させていくとともに、思いやりのある言葉について児童に考えさせる場を設定する。そうすることで、思いやりのある言葉の語彙力を高めていくことができると思う。また、睡眠不足や運動不足などが原因で気持ちがいらいらしたりぼんやりしたりしながら過ごしていると、相手を思いやる余裕がなくなる。健康面も意識しながら心身ともに健やかに育ち、思いやりのある言葉を使うことができる児童を育成したい。		
達成目標	相手の気持ちを考えて言葉を使うことができたとして自己評価する児童が85%以上。		
方 策		評価	
		中間	年度末
①	学級活動や道徳科等の時間を活用し、相手を思いやる言葉や挨拶について話し合ったり、掲示や呼びかけで広めたりすることで、思いやりのある言葉を使うことができるようにする。	B	A
②	朝活動の時間や休み時間に楽しく体を鍛える時間を設定し、教師が効果を説明しながら体幹を鍛える運動や体力アップにつながる運動に取り組ませることで、児童が互いに励まし合いながらよりよい学校生活を送ることができるようにする。	B	A
総合評価	A	相手の気持ちを考えて言葉を使うことができたとして自己評価する児童が94%以上であり、目標を達成することができた。 電子黒板に動画をアップしたり、運動週間を設ける等、運動に取り組む機会を多く取り入れたことで、運動することを楽しいと感じる児童が多く、互いを励まし合う温かい言葉を掛け合いながら運動に取り組む児童の姿もみられた。	

<評価基準> A…達成した B…ほぼ達成した C…あまり達成できなかった D…達成できなかった

取 組 状 況	
1 達成目標の実態	①「思いやりのある言葉を使っているか」という項目で、「よくできた」、「まあまあできた」と回答した児童の割合は児童が94%、保護者は93%だった。児童は、全体としての大きな変化はないが「1 ふだんから相手の気持ちを考えて、思いやりのある言葉を使っていますか」、「2 あなたのまわりには、相手の気持ちを考えて思いやりのある言葉を使う友達がいますか」の質問項目の割合が減った。保護者の回答では、「相手の気持ちを考えて思いやりのある言葉を使えていると思う」と回答した割合が増えた。 ②「運動することを楽しいと感じている」という項目で「楽しい」と回答した児童が99%だった。「朝から元気に活動するための早寝」という項目で「よくできた」、「まあまあできた」と回答した児童が76%、夜9:00までに寝ている児童は44%だった。
2 方策について	①については、日常にあるありふれた場面を想定し、どんな言葉をかけるとよいかを考えたり、相手の表情を読み取ったりするためのSSTやほめほめ挨拶運動に取り組んだ。その結果、SSTでは、児童同士が互いに活動後の感想を伝え合ったことや、挨拶運動では、相手を褒める言葉を言うだけでなく、視覚的にも相手を意識した挨拶のよさが分かるようにした。その結果、相手意識の高まりが見られ、相手の気持ちを考えるとはどういうことかを見つめ直すきっかけとなった。 ②については、朝活動の時間に体幹を鍛えたり、体を目覚めさせたりする体操を学級の実態に合わせて実施した。また、マラソン大会に向けて運動週間を設けるなど、体を動かす機会を多く設定した。運動週間では、自分の目標に向かってひたむきに頑張る姿や、走りきろうとする友達を応援したり、賞賛したりする姿がみられた。友達に誘われて、自分も挑戦してみようという児童が少しずつ増えて、褒められるうれしさから目標を達成するために家庭でも体を動かそうとしたりする児童がいるなど、友達との関わりを通して、運動を楽しむ様子がうかがえた。
3 今後の課題と改善策	①については、1学期と比較して全体の数値に大きな変化はないが、SSTや挨拶運動の取り組みを通して相手意識が高まり、自分の言動を客観的に振り返ることができたのではないかと考える。今後も自他を理解するための活動を続け、友達との関わりからよい言動を学ぶことや教師がモデルを示すことで、相手を思いやる心を育てていきたい。 ②については、「好きな運動だけ楽しい」と回答した児童が増えており、新しい運動に消極的だったり、苦手な運動が多かったりすることが考えられる。学級での体幹運動の様子から、リズムよく手足を動かすことや目を素早く動かすこと、目と手の協調性や手指の巧緻性等に差があることが分かった。今後は簡単にできる様々な運動(遊び)を提案し、体を動かすことが楽しいと感じられる機会を増やす必要がある。